滿洲・支那の習俗　目次

序……一

第一篇　子授けの祈り

一節　男子を欲する理由……一
二節　願立て及び其の迷信……二
三節　お宮の人形を貰ふこと……一六
四節　神佛の鞋を盗むこと……二八
五節　神佛前の造花を貰ふこと……三一
六節　信仰する物體を撫でること……三三
七節　寺廟に宿して子を祈る……三六
八節　借子……三八
九節　生ける子を神佛に捧ぐることを約束して祈る……三八
十節　祖先の靈への願立て……三九

第二篇　小兒と魔鬼

序　言……四三

一　節　小兒と關係ある妖魔……四四

一　項　偸生鬼……四五

二　項　討債鬼……四八

三　項　討替生鬼……五三

四　項　犧牲として小兒を取る鬼……五四

五　項　天狗……五五

六　項　夜星子……五八

七　項　雜　神……六一

二　節　妖魔に對する防禦法……六五

一　項　小兒の死體を虐待する法……六六

二　項　夜星子を防ぐ法……六九

三　項　一般の防禦法……七二

第三篇　魔除けとしての小兒の首飾

總　說……七九

一　耳　輪　の　類……八一

二　鎖や腕輪の類……八一

三　首　輪・鼻　輪……八二

一　項　鎖……八三

二　項　線　鎖……九二

三　項　錢　鎖……九六

第四篇　乳名に就いて

概　說……一〇一

一　深い意味なくして付ける乳名……一〇六

二　多壽多福を希ふ意味の乳名……一〇八

一　項　鬼を防ぐ方法としての乳名……一〇八

二　項　其の他の場合……一一四

第五篇　竈　祭　り

一　節　概　說……一二七

二　節　家庭と竈神との關係……一二九

三節　祭祀の源流……一三一
四節　火の崇拜と竈神……一三七
五節　竈神の昇天……一四一
六節　神様の下界調査……一五一
七節　竈神の身分と傳說……一五四
八節　竈祭は男子の祭……一六四
九節　竈君昇天の通路……一六八
十節　竈祭の日に就いて……一九九
十一節　竈祭の特種の風俗と俗信……一七三
一項　特種の風俗……一七三
二項　竈祭と俗信……一七五
第六篇　臘八粥
一節　日本の臘八……一八一
二節　支那の臘八……一八二
三節　臘八に關する傳說……一八五

四節　臘八粥の附說……一九一
五節　臘八粥の作り方……一九三
六節　粥の御利益……二〇一
七節　特別の風習……二〇四
八節　此の日に關する迷信……二二四
第七篇　雨乞ひ、日乞ひの話……二三一
一節　儉龍王……二三二
二節　旱魃の話……二三七
三節　河掃除の話……二三二
四節　掃晴娘（照る照る坊主）の話……二三六
第八篇　繕牌
一節　總說……二四一
二節　繕牌の種類と形狀……二四四
一項　皇太子皇后皇妃用のもの……二四五
二項　親王郡王貝勒貝子八分輔國公の用ふるもの……二四七

三　項　一般有爵者及び京内外大臣以下百官の用ふるもの……二四九
三　節　繕牌の文字……二四九
四　節　皇后、皇妃の繕牌……二五一
五　節　繕牌の取扱者に就いて……二五五
六　節　王公大臣等の繕牌呈出の手續……二五七
一　項　常例に依る繕牌呈出……二六一
二　項　特別に呈出する繕牌……二六三
第九篇　閨房の習慣……二六五
第十篇　處女性を示す喜帕の話……二八九

滿洲・支那の習俗

139732
NOV 29. 1965

第一篇　子授けの祈り

一節　男子を欲する理由

子供が欲しいといふ事は人間としての通有性で、別に不思議でもなんでもないが、色々の意味に於て支那人位これを欲しがる人種は他に餘りあるまいと思ふ。孟子の「不孝有レ三、無レ後爲レ大」といつた言葉は、恐らく支那人が子孫に對する觀念を最も簡單明瞭に言ひ表はしたものであらう。靈魂不滅を信ずる支那人は、位牌を以て死者の靈魂の據る所とし、之れを祭つて日夕の禮拜を怠らないのであるが、若し萬一子孫の斷絶することあらば、祭祀の道も亦絶えて、爲めに祖先は皆な不祀の鬼と化さなければならない、これを不孝の最も大なるものとするのである。依つて是非共子孫を擧げて、祖宗の靈を慰め、祭祀を絶やさぬ樣にしなければならぬといふ考へから、

東洋文庫

子供を擧げることを人生の重大義とするのであつて、折角妻を娶つても、若し大切な子孫を擧げることが出來ぬとすれば、祖先に對して申わけのない事なるが故に、從つて子無きを七去の一つに數ふる風習を生むに至つたのである。廣東省には、婦人を罵る言葉に、絶代魔といふ言葉がある。子の無い爲めに代を絶つ女といふ意味で、代を絶つ女をいかに詛つてゐるかを知るに足るであらう。

子供といつても、家を繼ぐものは男子なので、子供といふ概念に就ては、日本人と支那人とでは餘程の相違があるのである。日本では、子供といへば男子も女子も區別はしないのが普通であつて、人に對して『お子さんは幾人ですか』と問はれゝば、男女を合せた數を以て答へるのであるが、支那では、『お子さんは』ときかれたときは、必ず男子の數だけを以て之れに應じ、女子の數は、特に『令孃は』と聞かない限り、決してこれを子供の數には入れないのである。つまるところ女兒は、子供の數には入れてないと言つても過言ではない。それ程男兒を大切に考へるのである。禮記曲禮上にも「男女長を異にす」といひ、男女の子供を別々に數へて混同しない事を云つてゐるのである。これは女子は男子とは別に數へてあるから、現在に於て『お子さんは何人ですか』と問はれた時、女子を除いて男子の數丈けを擧げて答へることに當るのである。

詩經にも「吉き夢は維れ何ぞ、維れ羆なり」（小雅斯干）「大人之れを占ふに、維れ羆、維れ羆は男子の祥なり」（同上）として男子の雄々しきに譬へ、更に「乃ち男子を生まば載ち之を牀に寢せ、載ち之に裳を衣せ、載ち之に璋を弄ばしめ、（中略）乃ち女子を生まば、載ち之を地に寢せ、載ち之に褐を衣せ、載ち之に瓦を弄ばしむ」とある。男子ならば牀に寢させ、女子ならば地に寢させる。男子には裳を着せて其の裝を盛んにし、女子には褐を着せる。男子には璋を弄ばしめて、其の德、王の如くなれと敎へ、女子に瓦を與へて、早くから女工のまねを學ばしめる。其の差別の甚しき、かゝる昔からかくの如しである。從つて男兒の出生を大喜といひ、女兒の出生を小喜といひ慣はして、其の間に格別の區別を付けてゐる程である。

古昔に於て、男女の取扱ひと待遇に斯くの如き區別あり、現代に於てもやはり同樣であることは、既に之れを述べたが、更にこれを現代流行する俗諺について、女子を喜ばぬ一例を擧げて見よう。

養活猪、吃口肉、
養活狗、會看家、
養活猫、拏耗子、

養活你這丫頭、作甚麼。

といふのがある。其の意味は、

豚を飼へば　肉でも食へる
犬を飼へば　番でもして呉れる
猫を飼へば　鼠でも取つて呉れるが
娘よ、お前を養つて何になる？

隨分馬鹿にした云ひ方ではあるまいか。

男子重くして、女子輕んぜらるゝこと上述の如しとせば、男子を得んが爲めには、女子を犧牲にする位は何んでもないことで、或は極端な一例かも知れないが、民國十七年六月十五日の奉天市報といふ、奉天市政公所、即ち奉天市役所から出た支那新聞に、「娘を殺して子を求むるの慘聞」といふ題で、次ぎの樣な記事が載つてゐた。假令極端な一例であるとしても、先づ一般支那人の男子を得んとする心持の一端は、これに依つてうかゞひ得られると思ふ。

鎮（村のこと）に錢某なる者あり、理財に長ずるも、而かも嗣息に艱む。年不惑に屆り、歡を膝下に承るもの、僅かに十五齡の女のみ。不孝の慮り、懷に深し。竟に妾を納れて嗣を廣

くせんと欲するも、又闔威を恐る。蓋し其の妻王氏は著名の悍婦に係れば也。

といふ風な支那新聞一流の書き出しに始まり、更に（以下意譯）

「今年偶ま妻王氏の孕めるにより、支那人の習慣として、腹中の兒が男であるか女であるかを先づ確めたいと思ひをる内、小神仙と號する星相家が村にやつて來て、其の占ひがよく當るといふ評判が高いので、錢氏夫婦は急いで小神仙を招き、禮を厚うして、お腹の中の兒が男女何れであるかを占つて貰つた。然るに占ひ師の言葉は、『此の度は必ず男の子らしいが、此の運氣は非常に尊貴であるが、併し男女の運氣を兩方とも同時に受ける事はむつかしいから、どちらか一つは缺けなければならぬ。貴家には、已に女子が授かつてゐるから、今の腹の中の兒は、將來、或は花は咲いても實が結ばぬことになりはすまいか』といふのであつた。錢夫婦は、それでは『禳解の方法は無いか』と聞くと『天命であるから、變更は出來ぬ』と答へた。それから錢夫婦は、如何に可愛く育てた娘でも、家を繼がせる大切な男の子には代へられない、此の娘あるが故に、胎兒にまで影響があるとすれば、現在の娘は殺しても、腹の中の兒は、男子として產み落したいといふ考へになつて、いつの間にか殺氣が動いた。が、さて双物を以て殺害すれば、世間に知れる虞れがあるといふので、徐ろに世間の注意を惹かない樣にして之れを斃

す方法を考へたあげくに、先づ初めは段々に娘に食べさせる毎日の食物の量を減じて行つて、遂には斷食同樣の目に遭はせ、弱るに從つて最後に衣服を褫いで凍死せしめた。」

といふのである。

新聞の廣告欄を見ると、大きな文字で「求レ嗣者、醫」(子を求むる者はみよ)といふ見出しの、醫者や賣藥の廣告が無暗に出てゐるのも、やはり此の弱點をねらつたのである。藥屋の金看板には「廣嗣虎骨」といふ樣な大きな金文字が出てゐる。虎は强い精力があるので、其の骨で作つた藥を飲むと子を得るといふのである。

家を絶やさず、祖先の祭祀を盛んに續けて行き度いといふ觀念は、延いて多くの子供を得度いといふ觀念となり、双子や三つ子を生むことをめでたいとして祝ふ風習となり、昔は天子から賞與が下がる例になつてゐたのであつて、以前にはよく新聞紙で見たことであつた。古い書物には此の種の多くの記錄が盛られてゐる。

子孫を絶やすまいといふ念は、卽ち祖先の祭祀を絶やすまいといふ念であるので、子の無い人

は、遂に養子制度を採用する樣になつたが、養子といふ制度は、萬已むを得ない場合にのみ限られるのであつて、自身の實子に家を相續させて眞の自分の血統を永く殘したいといふ一念は、遂に其の子の爲めには、子から見れば眞實の產みの母親であり、自分から見れば恩愛のきづな絶ち難き妻をさへ犧牲にした極端な例が少くないのである。

漢の武帝は、老いて後、年若い鉤戈夫人に一子弗陵を生ませた。帝は先きに戾太子といふ皇子があつたが、親子爭ひの結果、之を殺してしまつたので、只今一人殘つた弗陵が五、六歲に達したとき、智慧付きもよく、發育もよいので、可愛くてたまらず、之れを太子に立てゝ、自分の持つ大帝國の世繼の皇子として、國を讓り、皇室を萬世に榮えさせることが、唯一の希望でもあり樂しみでもあつたが、しかし年老いた帝は、この幼い、いたいけな太子と、美しくて年若い鉤戈夫人を殘して死ぬことになつたならばといふ心配から、いつとなく、昔の呂后の專權の二の舞ひが此の若い鉤戈夫人に依つて演ぜられるのであらうことを恐れて、遂に意を決して、霍光を擧げて太子の輔佐たらしめ、罪もない愛する鉤戈夫人を獄に投じて殺させてしまつた。

こんな例は、支那歷史には少からずある樣である。

更に祖先の祭祀を絶たない爲めに、子孫の繁昌を期するといふ觀念は一轉して、逆に子孫の有

無と其の繁榮すると否とは、家を護つて下さる祖先の靈の影響如何に依るといふことに變じて來た。恐らくこれは、祖先の祭祀を粗末に扱はない樣にと敎へた敎訓の結果であらうと思はれるのであるが、更に變じて、子孫を授かると否とは天意であつて、積善、不積善の自己の行爲に對する因果應報で、積善の家には餘慶を惠まれて、子孫の富貴繁昌と長壽とを與へられ、不積善の家には餘殃を以て報いられる、といふ樣な道德的敎訓にまで及ぼして來てゐるのである。

善根をほどこして子供を授かつたといふ記事は、數年前上海の新聞にも出てゐた。それに依ると安徽省の歙縣――これは昔から硯の名產地として名高い土地である――に汪といふ金持ちの老人が居る。常に慈善を以て樂みとし、最近にも、先年の陝西河南の大饑饉に、現金二萬元で糧食を買ひ入れて惠んだ外に、まだ田畑まで賣り拂つて金に替へ、救濟資金に寄附した程である。この人は已に七十歲に達したが、不幸にも子供が無いので、後繼ぎを得たい爲めに四人も妾を納れたが、一向に子供が出來る樣子もないので、遂に一昨年誕生日を祝つた日に四人の妾に向つて、お前方は皆んな年若い身で、自分の樣な老人に奉公してゐても氣の毒故、それ〴〵良緣を求めて身の振り方を付けるがよいとて、五百圓づつを與へて暇を遣つたが、中に一人一番年若い、やつと二十歲になつた許りの妾は、如何しても暇を取らうとしなかつた。この妾の父親といふのは、

貧乏な小作人で、不圖した事から土匪の仲間と間違へられ、獄舍に繫がれて苦しんでゐたのを、この老人が聞いて、色々と運動して助けてやつた事があるので、一つには其の恩返しにと娘を妾奉公に出したので、一生此の老人に仕へる決心を以て暇を取らなかつたが、遂に此の程玉の樣な男の子を產み落した。これもこの老人の慈善心に對する報いであるといつて、非常な評判だといふのである。

男子を生まんことを祈る習慣が、昔から行はれた事は、色々の記錄に見る事を得るが、唐の歲時記に、七夕、俗に蠟を以て嬰兒の形を作り、水中に浮かせて游び、婦人子を得るの祥とし、之れを化生と稱した事を記し、三體詩にも辭能の詩に、「自是三千第一名、內家叢裏獨分明、芙容殿上中元日、水拍銀盤弄化生」とこの事を歌つてゐる。

現在の開けた時代に於ても尙ほ如何に子供を欲し、且つ子供に就ても重男輕女の思想が、滿人並に支那人の間に行き亘つてゐるか、これを直接滿人並に支那人の口から聞いて見ることも意味あることであらう。左に上海の新聞に揭載された論評の一部を拔いて見よう。それには「重男輕女」と題し「何人も知れる如く、男を重んじ女を輕んずるは、是れ中國幾千年來流傳し來つた一種の惡習俗であつて、總じて男子を喜びて、女兒を喜ばないのである。近來男女平等問題が提唱

されて來たので、稍々知識階級に在る人々は、口にこそ其の不都合を唱へてはゐるが、心の裡ではやはり重男輕女否男を喜んで、女を惡む思想は少しも廢つてゐないのである。或者は、「男子は宗を傳へ、代を接することが出來るので、不祀の鬼となることを恐れて男兒を喜び、女兒を惡むのだと」云ひ、或者は「男兒は門庭を光耀し、一家の經濟生活を維持するが故に、「喜男惡女」の思想は當然である」とし、或者は、「女子は成長の後、多額の嫁入仕度をさせて他へ嫁入らす丈けのことであるが、男子は親のもとに在つて侍奉するのみならず、子孫を傳へるのであるから、この考へは當然だと稱す。」云々と、現在支那人の女兒を輕んずる思想を明白に書き表はしてゐる。

更に土俗的資料から重男輕女の實際を見れば、滿洲でも、北支でも、男子が產れると、其の產室を喜房と云ひ、女子が產れると只產房とのみ云ひ、喜房の方へは、誰れも喜んで出入するが、產房の方は一般に汚穢の場所として餘り出入を好まないのである。

併し西藏に行くと、寧ろ女子の生れるのを喜ぶ地方がある。これは女子が男子に比して非常に少い爲めに需要が多いから、育てた上で效果が多いからで、一人の女が數人の男兒弟に嫁する風さへあつて、同じ支那とは云へ、全然風俗習慣を異にしてゐるので、これは例外としなければならないのである。

繼嗣子の有無が、支那人の家庭生活に如何なる影響ありやといふことは、前段に於て略之を述べたが、それ程大切な子供故、結婚後子供の無い婦人は、一所懸命になつて神佛に向つて願立てをするものが多い。それこそ全くの神頼みである。しかも神佛だけでは足れりとせず、更に種々雜多な迷信を生むに至つたのであるが、私の筆は其の大體を記すに止まるけれど、若し支那全國にわたつて之れが調査を進めたならば、必ず須晴らしい興味あるものが得られるであらう。

二　節　願立て及び其の迷信

子を禱るために願立てする神佛の種類は頗る多い。先づ最も普通に行はれるのは娘々廟であらう。娘々は北方にては泰山娘々が主として信仰せられ、南方にては福建省に發達した海神としての天后卽ち娘々が中心で、之に伴うて種々の女神が祭られてゐる。これ等の神に關しては後に詳細に記述するであらうが、元來泰山は、支那各地に必ず祭られてゐる東嶽廟の本家であり、泰山府君を祀る廟で、人の生死を司どると云はれる所から、之れを祈れば子供を授けられると信じぜられ、又泰山玉女の傳說は、東嶽廟內に合祀せられる娘々となり、後世にては泰山に祈るといふ

よりも、却つて娘々を主として禱る樣になつてしまつたのである。又福建の天后は、もと海神として祀られたものであるから、航海業者と聯絡ある地方には、必ず天后宮が祀られて山東渤海の沿岸に及び、天后が女神なるが故に、これまた生産の女神として、泰山娘々と合流してゐる爲めに、其の間、判然たる區別はつけられない狀態であるが、之れを概括的に見れば、海岸の船着き場には、天后宮內に娘々が合祀され、海岸を離れた地方は、東嶽廟があつて、之れに娘々が合祀されてゐると見てよい樣である。

天后宮娘々像

これ等娘々神に關しては、別に研究を發表するつもりであるが、要するに觀世音菩薩から來た思想であつて、觀世音は唐代に於て太宗の諱を避けて世の字を取り去つて、それ以來觀音と稱する樣になつたもので、佛家の考へでは觀音即ち佛で、種々の法身を具へ、女子の爲めに法を說くには女相に現じ、男子の爲めに法を說くには男相に現ずる等、各種各樣の相を具へてゐ

るのであるが、普通に現はされてゐる相は女相で、常に楊柳の淨瓶を捧げ、其の甘露を以て世を濟ひ厄を救ふのであつて、其の一相たる送子觀音こそは、即ち支那全體に流行する送子娘々の本體であると思ふ。送子觀音は送子娘々と同じく手に嬰兒を抱いて、嗣子を求むる人々の絕大なる信仰と崇拜を受けてゐるのであつて、關帝と呂祖と併せて、支那人信仰の中心となつてゐるのである。

東嶽廟即ち泰山の神は、人の壽命を司どると共に、死者の魂の據る所であり、且つ死後の裁判を受ける所と信ぜられるが故に、北方支那に於ける信仰の最も高い所で、古代よりのこれが祭祀に關しては改めて云ふまでもなく、歷代の天子は、其の萬壽節に必ず勅使を東嶽廟に

觀音菩薩像

派遣せられて、長壽を禱られたのを見ても知ることが出來るであらう。

滿洲では娘々神の外に胡仙（狐仙）卽ち胡三大爺に祈るものも少くない。これは胡仙堂に參詣して祈る者と、巫覡に賴んで大仙に祈る者とある。これを跳大仙とも薩媽とも云つてゐる。日本の狐憑きと同じで、大仙が乘り移つて來て、符や藥方を與へるのである。

其の他に願掛けの神は數多く存するが、これは章の進むに從つて追々に說明するであらう。

これ等の神佛に對する願立ての形式と、其の願ほどきの形式とは、何れも略似寄つた手續きで行はれてゐる樣である。

先づ願立ての際は、線香蠟燭を獻じ、或は饅頭菓子乃至は肉類等の食物を以て供物とし、神壇の前に跪坐して願ひ事を述べる丈けのことであるが、願ひ事を叶へて下さらば斯く斯くの物を以て、或は斯く斯くの行爲を實行して御禮を致しますといふ約束をするのである。其の御禮の方法又は獻上すべき物品は、當人の熱心の程度と其の家の富の程度に依つて異なるは勿論のことで、又神佛の種類に依つても、其の獻上品を考へなければならぬのである。

富豪の家で是非共嗣子を必要とする場合には、新たに廟宇の建築を以て約束とする者もある。又現在の廟宇を修繕するといふ約束を以てする者もある。最も普通と見られるのは、其の願ひを

叶へて下さつた神佛の像を、新たに塗り替へて上げる事や、其の像に對して新たに衣冠並に靴を新調して上げるといふ樣なことである。花を獻ずること、御馳走を獻ずること、廟會の時、自身の身體を苦しめ、苦行の形式で參詣することを以て、還願とするなどは、只のありふれたことに過ぎない。又金文字美しい額面を獻上することも普ねく行はれ、旗、旗杆等の獻納も常に見るところである。惡魔除けの意味で弓矢を獻ずるものもある。そして效驗があつたらば、必ず約束通りの御禮をしなくてはならぬ。斯くまで賴りにする神佛のことであるから、若し之れに對する謝禮の實行を怠らば、神佛の罰立ちどころに到るものと考へてゐるのである。

この子を神に祈る習慣は隨分古くから行はれたものであつて、昔は郊媒の神を祀つて之を禱つたものである。詩經、大雅生民に「厥初生民、時維姜源、生民如何、克禋克祀、以弗無子」とある如く、姜源、子無かりしを以て、其の病を祓ひ除きて、郊媒の神を祭つて子を祈つたのである。郊媒とは郊外に於て天を祭る時、先媒を之れに配したのであつて、先媒とは、昔嫁娶の媒を始めた人と考へられてゐる人物であつて、結婚して子を生むは、此の媒氏の嘉祥に據るものと信ぜられて、之を神として祭る樣になつたので、禖の字、卽ち示扁の文字を用ひる樣になつたのである。

三節　お宮の人形を貰ふこと

子孫を祈るに最も普く願立てするのは、娘々及び送子娘々或は子孫娘々といふ女神で、支那到るところに娘々廟があつて、其の中に祭られてゐる。其のお宮は、南支那では子孫堂とも子孫廟とも百子堂とも云ひ、或は單に娘々廟とも云ひ、處に依つては天齋廟や其の他の神廟の境内に附屬した廟のあるところもあり、或は觀音堂の内に併祀されてゐることも見るが、東嶽廟内の娘々廟に參詣するものが一番多いのである。

大都會の大きな娘々廟では、主神が天母娘々又は聖母娘々で、送子娘々は副神として祀られ、小さなところでは送子娘々を主神としたところもある。又子孫娘々と稱してこれを子女生育のことを司どる女神として、其の下に送子娘々を祀るところもある。又北滿地方及び南滿洲の一部では、白衣菩薩と稱して白衣觀音を祀り、廣東地方にては、南海大士として觀音菩薩を祈る外に、金花夫人祠に詣でるものが甚だ多いのである。

これ等のお宮に參詣すると、其の神像の周圍に、ところ狹きまでに可愛い大小の人形が並べて

ある。この人形の中で、自分が可愛いと思ひ、又自分の子供として欲しい顏をしたのを選んで、それを貰ひ受けて歸る習慣である。この人形は男子のが多く、女子のは甚だ少い樣である。これ等の人形は、かくの如く數多の婦人の手に貰ひ受けられて持ち去られるのであるが、子供を授かつた婦人は、其の御禮に新らしい美しい人形を倍數にして返す習慣である。地方に依つては、公然と貰つて行かず、密かに、人に知られぬ樣に盜み出さぬと效驗がないと信ずる地方もある。

又地方によつては、人形を持つて歸らずに、お宮に參詣して、神樣に祈禱してから、其處に並べてある人形を選んで、其の人形の首に赤い紐或は五彩の組み糸を掛けて置くことに依つて、其の人形と緣を結んだしるしとする地方もある。又其の赤紐或は五彩の絲に穴錢を結び付けて、人形の首に掛ける地方もある。又お宮に並べてある人形とは緣結び丈けをして、門前に賣つてゐる人形を買つて、それを持つて自宅に歸る地方もある。

又人形を貰ひ受けて歸る時、其の堂守り或は和尚等から、人形に名を付けて貰つて歸り、將來子供が生れた場合、其の名を子供に付ける地方もある。

この人形にも土製のところもあり、紙製のところもある。昔は陶器製の美しい人形を見たものであるが、近來は非常に少くなつて、只土製の人形に下品な色を塗つたものが多い。原始的藝術

品としては喜ばれるかも知れないが、民國になつて各地方とも爭亂が絶えないので、人心に安定がない爲めか、これ等の人形まで甚だ粗末になつて來たのである。何れも脊丈け三寸から四、五寸位のものである。又紙製の人形を貰つて來る習慣は極めて少いと云ひ得るであらう。

又自分で人形を買つて、それをお宮に持ち行き、神佛の前に祈願をこめて百日間預けおき、滿願の日に參詣して持ち歸り、將來嗣子を授かつた時に、約束の品を整へて御禮參りをする地方もある。大連松山寺の如きその一例である。

人形を支那語で娃々といひ、泥人形だから泥娃々といふ。之を貰ひ受けることを拴娃々といふ。其の意味は、この子と見込んで緣を結ぶ人形であるから、前に記した通り赤い紐を首に掛けて緣結びすると同時に、其の緣の切れない樣にといふ意味である。甚だしいのになると、人形に衣物を着せ、紐を嚴重に結んで持ち歸るのもある。從つて紐で緣を結ぶことを人形に逃げられぬ用心であるといふ風に解する者が多いのである。

お宮から人形を貰ふに、公然とする地方と、極秘にして持ち歸る地方とある樣に、家に歸つても、これを公然と寢室に飾つて、朝夕愛撫して、食事を供へる地方もあれば、反對に秘密にして或は之れを寢間の敷蒲團の中などにかくし、或は簞笥の中にしまひ込んで、鍵までおろして人に

見られると效驗がないとする地方もある。何れにしても人形の首に赤い紐を掛けて緣結びとし、或は逃げられぬ樣にすることは一樣である。

奉天東嶽廟では廟會の日には、廟前に於て數多の婦人が眞田紐を賣つてゐて、婦人の參詣人を見れば無暗に押し付けてゐる。そして此の紐を買つて人形に結んでゐる有樣を見るに、其の結び目が咽喉のところにあつて、其の餘りが胸に垂れてゐて、丁度洋服を着てネクタイをしめた形に似てゐるのである。又東嶽廟の僧侶の話に依ると、此の人形を持ち歸つて五日間は人に知らせてはならぬとのことであるが、大概は殊更に人に告げぬ風習の樣である。又奉天北塔寺といふ喇嘛廟の天地佛は、同宗の宗旨を象徴するところの男女の二大裸體像が相抱擁した像で、天地交泰と名づけて有名であるが、又一面に於て子授けの神として有名で、開廟の時は、子を得んとして紅繩を持つて人形を綱りに行くもの、絡繹として絶えないのである。

北京の例を擧げれば、主として朝陽門外東嶽廟內の子孫娘々殿に詣で、願立をして、殿中の土製娃々の內好ましいのを一つ選んで、五色の糸を以て其の頸に結び、自宅に連れ歸れば久しからずして孕むといふ。又殿中に並んでゐる磁製の小娃々を、用意の赤布を以て包んで、こつそり

懐中にして歸り、實子の如くに抱いて眠ると、必ず子を授かるともいふ。これは俗に偸娃々と云つてゐる。果して子を授かつた場合には、十個とか二十個とか乃至は百個の娃々を、御禮に返納する者もある。又殿中の小形の鞋を偸んで來て、枕の下にかくしておくと孕むと云はれてゐるが、鞋を偸む場合は女兒を孕むものと考へられてゐる。

天津地方に於ける　捏娃娃の方法は、婦人が月の一日又は十五日に、齋戒沐浴して、天后宮の娘々宮に赴いて進香するのであるが、前以て藍色の糸一本と制錢一文又は銀貨一枚を用意し、お宮で燒香後、人に知られぬ樣にして娘々神前に進み、神前にある籠の中から好ましい人形一體を選び取り、持參の藍紐で縛つて、其の人形のあつた處に錢を置く。これを壓子孫と云ふ。子孫を得たことに對して手付けを打つ意味である。この時の擧動は人に知られては効果がないとされてゐるので、人には告げないですることである。扨而、かくして神佛の前から連れて來た娃々を、家に歸つてから如何に扱ふか、これも各地各樣の風俗で、とても一々書くの煩に耐へないので、玆には天津地方の一例を擧げて他を推すの資料としたい。

天津では　捏娃々とも又抱娃々ともいふ。　捏　といふよりも抱いて歸るといふ方が聞えがよい

樣だ。

家に歸ると、其の人形のために帽子も被せ、着物もつくり、鞋も作り、靴下も添へ、可愛いお人形さんにして、それを寢室に飾り、毎日の食事、お茶までも供へてやり、四季の移り變りに應じて、衣物も帽子も、それ〴〵の季節に應じたものに取換へ、又節句或は家庭に祝ひ事でもあれば、必ず御馳走をしてやる。それから人形は、連れて歸つた年を以て其の家庭に生れた年と見て其の年の年廻りに依つて、其の子の年廻りを戌の年生れとか、午年の生れとかきめておいて、年齡も年々に數へて行き、恰も自家に生れた子供と同じに扱ふのである。又其の人形は毎年年齡を重ねることになるのであるから、年々少しづつ大型のものと取り替へて行つて、さながら自身で生んだ子供が生長して行くものと見て樂しむ。かく大型の人形とするために、專門の人形屋にやつて、大きく作り替へる事を洗娃々といふ。洗娃々を專門とする人形屋は、天津の宮北・宮南・估衣街に相並んで繁昌してゐる。店のショウウインドウの中に、美しく修飾されたのが並べてあるのは、皆頼まれて修繕しつつあるのである。

又人形には乳名を付ける。それは實際の子供を授かりたい方便としての人形であるから、其の付ける名も亦、それに因みのある緣起よいのを選んで、招弟とか領兒とか、引兒或は帶子とかい

ふのが多い。弟を招くとか、子供を連れて來るとか、子供を引くとかの意味であるが、心には之を長男と考へ、若し實際の子供が生れると、それを人形の弟として、子供が成長するまで、其の人形を兄として仕へさせ、一切の禮儀も正しく行はせるのである。例へば、子供の誕生日には兄として其の前に叩頭させ、生長して結婚した場合には、新夫婦は人形にお辭儀をし、新婦は人形に對して義兄としての禮を執る。

又新夫婦に子供が出來ると、其の子供は人形に對して伯父さんと呼ばせ、そして子供達には決して人形を玩弄視することを許さないのである。

又人形に對して招弟とか領兒とか引兒とか命名した以上、其の後に於いて子供を授かつた場合には、其の生れた子供に對しては其の弟分として、「二招」とか「二領」とか「二引」とかいふ風に命名するのが普通である。即ち「二番目の招弟」「二番目の領兒」といふ程の意味なのである。甚だしいのになると、家に不幸があつた場合に、他の子供と同樣に、此の人形にも喪服を着せる家さへあるといふ。又かくして生れた子供に對して、其のお宮の道士を師父と仰ぎ、季節毎或は子供の誕生日には相當の進物を怠らないといふ。十三歲位に達した時、始めて還俗と稱して師弟の關係を離脫するのであるが、富豪になると廟の方から關係を續けることを怠らぬといふ。

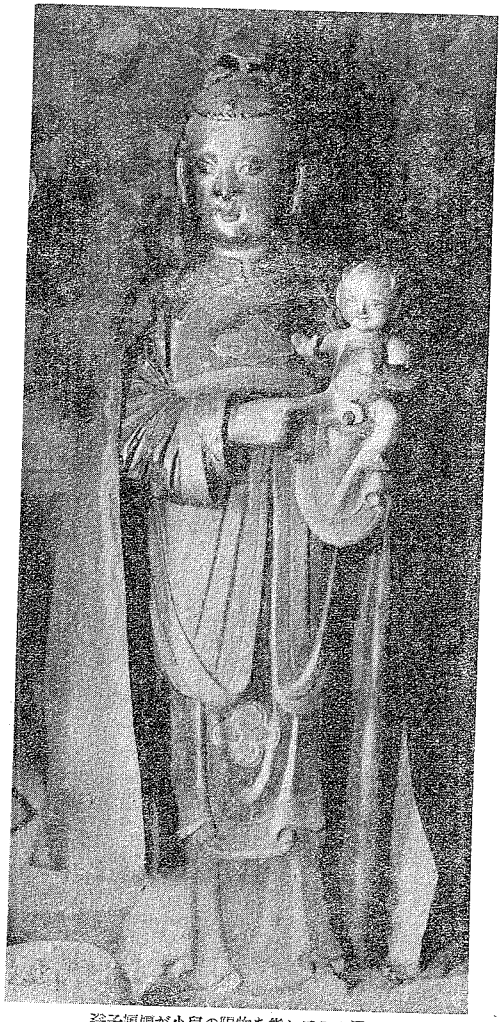
又子孫娘々に參詣して子を祈る習慣に、前に述べた如く、單に拴娃々或は抱娃々の外に、尙一種の面白い習慣があつて、之も滿洲支那に廣く行はれてゐるのである。それは娘々殿の兩側に送子娘々と送子爺爺とが相對して侍立してゐて、送子娘々は大概可愛い男子を抱いてをり、送子爺爺の方は子供を脊負つて立つてゐる

そして男の子を抱いて立つ送子娘々の手の指は、大概其の抱いてゐる男兒の小さな陽物を指してゐる。參詣の人は、人知れず其の陽物を少しかぎ取つて歸り、これを飲むと懷胎すると信ずるのである。それで陽物は絕えず無くなるので、宮守は常に之を補充して行かなければならぬ。人形は勿論土製であるから、結局は陽物のところの土を取つて飲むのである。又滿洲も大石橋を中

送子爺々

心とした地方では、娘々宮へ參詣して、門前で賣つてゐる人形を買つて來て、それと同床すれば子を授かるといひ、又その人形に麥粉を以て陽物の形を作つて附けておき、之を食すれば男子を授かるともいふ。

小兒の陽物のことを書いた序でゞあるが、前にも書いた奉天北陵街道の天地廟の本尊に對し、



巻子頭頭が小兒の陽物を指してゐる

參詣人は、寺守りの喇嘛僧に便宜を得て、その壇上に上り、その相交つてゐるところの部分を、撫でることによつて懷胎し得ると信ずる者が多いと聞く。

營口にては天后宮、藥王廟、老爺廟（關帝を祀る）の一日、十五日の廟會に參詣して祈願をこめ、境内の露天に賣つてゐる不倒翁俗に搬不倒といふのを買つて來て、これを布で包み、箱の中にしまつて珍重し、逃げ出さぬ樣に保護することに依つて子を授かるともいふ。此の土地では、大概この一日と十五日とには、召使のものに小使ひを與れて暇を遣る習慣になつてゐるので、召使の老婆等は、大概此の不倒翁をお土産に買つて來て、若奥樣に贈るといふ。このお宮詣りを要廟ともいふ。こ

大石橋送鎭山の娘々祭、營口に近い老邊の觀音廟會で、若い娘の肩に、紐で括られた搬不倒がよくぶらさがつてゐるのを見る。

の地の不倒翁は、底部を土で作り、身體は紙製で、これに色彩を施し、丁度日本の達磨と同じ様な作り方である。

上述の 拴娃々は、お宮の緣日の賑やかな日に、富家の若いお嫁さんが大勢のお供にかしづかれながら參詣して、羞かしさうに神殿の前の多くの人形を物色してゐる樣は、却々趣きある風情で、若奥樣がうなづくと、母親や召使の老婆などがそれを選り出して、赤い紐を掛けたり、廟守りに挨拶したりする光景もおもしろいものである。しかしかゝる光景は、日中の人の出盛る頃は却々見られない。

又人形を持つて歸らぬ所では、神佛の前に並べられてある數多の人形から、好ましいのを選んで、其の前に錢や食物を置いて、『私の内に來て御飯をお食りよ』とか『私の内に來て美しい着物をお着よ』とか馴れ〳〵しく、我が子に對して物言ふが如く云ひかけてゐるのも屢々見受けるところである。

茲に一つの面白いことは、殿内に入つて祈禱し、又は人形を貰ひ受ける際、若し親戚等の子供を連れて來てゐる場合には、その子を決して殿内に連れて入らぬことである。それは娘娘神は

子供に對する特別の神である故に、平素數多の侍童侍女をお側に侍らせ、又は召使つてをられるのであつて、この神殿に並べられてある人形も、又娘娘神へ奉仕してゐる侍童侍女なのである。而して滿洲でも支那でも、これ等の侍童侍女が、往々にして神樣の許可なくして密かに逃げ出して、人の腹に投胎して、人の子として生れてくる場合があると考へてゐるので、自分が連れて來てゐる子供も、或は萬一其の投胎して生れた子供であるかも知れないので、若し然りとせば、神樣に見つかり次第、直ちに召し返される虞れがある。召し返されるとは卽ち死ぬことを意味するのである。故に心ある親達は、子供を決して神殿内へは連れぬのである。故に一般に子供が夭死する場合には、神に召し出されたものと考へる樣である。

又天津から塘沽方面では、娘娘廟に參詣して、そこで賣つてゐる造花を買つて來て、之れを子供の如くに愛することによつても子を授かり得ること、拴娃娃と同樣に考へてゐるといふ。

此の地方では、この 拴娃娃の風が盛んに行はるゝ爲めに、此の人形を重んずる結果、此の人形を睡炕又は寢臺の上に置けば、それに依つて、この睡炕なり寢臺なりの魔鬼を鎭壓する効がある、と信ずるに至つたのである。

る。不思議に思つてその家の主人を呼び出して尋ねて見ると、主人が曾て苗族征伐の時、あちらから携へ歸つた老婆であつて、その年齢も知らないが、又曾て言語を發した事もなく、只一匹の猫を飼つてゐる丈けで、かゝる老婆とは知らなかつたと云つて、老婆と猫とを一遍に焚き殺してしまつた。

これは恐らく夜星子が、梟卽ち夜猫子に乘つて飛ぶといふ說話が、文字の關係から猫に轉じた一例であらう。尙雜誌「民俗」に載つてゐる南方の地方傳說を紹介すれば、

（一）或る家で子供を產んで、三、四日經つと其の兒の哭き聲が次第に猫に似て來る。そこで母親はこれは鬼が憑いたのだと考へて注意してゐた。或る日子供が寢てゐる時、母親はわざと避けて、物蔭から密かにのぞいて見てゐると、果して一匹の黑猫がやつて來て子供の寢床の中に入つた。すると子供は猫と同じ聲で鳴き出した。其の晩母親は密かに子供を別室に連れて行き、子供の床の中には、東瓜を子供の樣に裝ふて寢かせておき、翌朝來て見ると、東瓜に猫の爪でかき裂いた跡が無數に殘つてゐたが、其の後子供は猫の樣な鳴き聲を止めた。恐らく鬼は東瓜を子供と間違へて弄死させ、其の目的を達したと思つて、其の後來なくなつたのであらう。

（二）鎖子鬼といふのが居る。專ら生れた許りの子供や、數ケ月以內位の子供を窒息させて殺すので、鎖子鬼と云ふのであるが、其の物は恰も仔猫の樣で、小さいながら極めて活潑且つ機敏であつて、眼光閃々として、其の小兒を害せんとする時は、いつも屋根からもぐり込んで來て、先づ猫の樣な聲を立てゝ鳴いて人を安心させ、部屋中を搜して食べ物を見付けて食べ、それから小兒の寢床に入つて、鎖死卽ち窒息せしめるのであつて、此の場合は小兒は窒息死であるから、聲も得たてず死んで行くといふのである。それで一般に、小兒がこの種の死に方をした場合には、此の鬼から窒息させられて死んだのだと信ずるのである。

七　項　雜　神

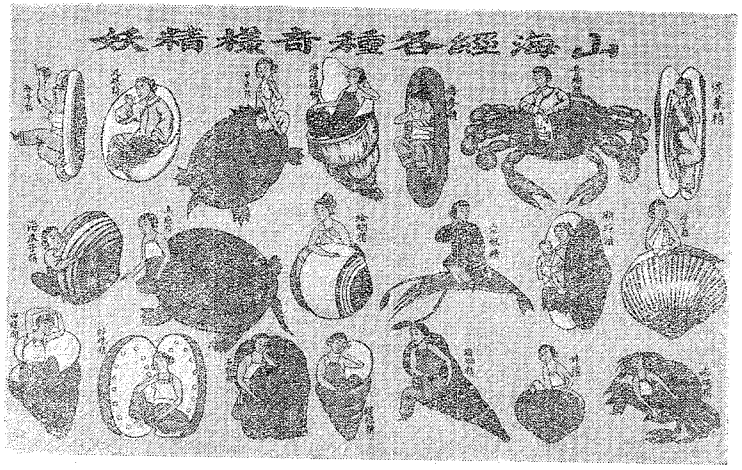
これは湖北省の人に聞いた話であつて、他の地方にどれ程の關係あるやを明かにしないし、且つ專ら小兒の魂魄を奪ふを目的とするのでもなく、只、事の序に、或は戲れにこれを爲すに過ぎないのであらうと考へられてゐるといふ事であるが、兎に角小兒の魂魄と關係があると云はれるので、玆に書いておく。

一、禿　脚　子

一體滿洲でも支那でも一般に考へられてゐることであるが、天下の物は動物でも樹木でも其他何物でも、或る動機を經て數十年乃至數百年を經過すると精神を持つ樣になり、神術を心得る樣になつて所謂「精」といふものになると云ふ。狐が數百年の修練を經て妖化するが如きはそれである。又器物でも、人の中指の尖端から出た血を故意に塗るか、或は氣の付かぬ間に、其の血が附着したのを、久しく日光に晒すと、妖化して精となるといふのである。故に支那では蛤の精もあれば箒木の精もあり、如何なるものでも精があつて活躍してゐるのである。

茲に述べんとする禿脚子といふのも其の一種であつて、主として南方で使用される便器の木

片の化して精となつたもので、便器を馬桶と呼び、恰も日本の飯櫃の樣な形をしてゐる。其の不用に歸して壞れた一片の木を取つて空室に置き、日夕禮拜して三年も經過すると精になると云はれ、それが化精すると、其の木片は小兒の形に似たものになるが、脚は一本脚で只飛んで歩くのである。それでこれを禿脚子と云ふのである。已に化して精となつたのであるから、神主を設けて供奉し、其の名も決して禿脚子と呼ばずして「小神子」と尊稱するのである。小神子はその性極めて狡黠で、人の陰私を探ぐり、人の財物を盜み取る技能を持つものであつて、夜出づる時は燈心草一本を天秤棒とし、玉子の殼二個を籠として、盜み取つた物をこれに入れ



妖精

て擔つて歸るといはれる。小神子の手に掛ると如何なる大量の物でも此の籠の中に納まるといふ奇術を有すると云はれてゐる。それで湖北省では、不要の燈心草を捨てる時は、必ず之れを小さく折つて捨て、玉子の殼も踏み碎いて捨てる習慣があるといふ。此の小神子を祭つてをれば、何でも欲する物を偸んで來て呉れるので、其の家は忽ちにして富むが、さて一旦小神子の氣分を損ずると、直ぐに他家に移り去つて、小神子自身偸み來つた物の外に、其の家に屬した物まで何時の間にか運び去つて、一家空しくなる虞れもあるといふ。

これが時として惡戯的に小兒の魂魄を盜む事があるといつて、子の親たるもの〻恐る〻とこ

ろとなつてゐるのである。

三、偸生娘々

これも北方では聞かぬ娘々神であるが、他の惡神の樣に專ら小兒の魂魄を取つて食料とするといふのではないが、惡戯の强い女神であつて、常に甲家の小兒の魂を取つて、これを乙家の將に生れんとする小兒に移し、其の子が生れてから又之れを丙家の小兒に移して見るといふ樣な方法である。これは恐らく子供が時々失神し、或は失魂の狀態になることがあるので、それを一種の神業と考へる結果、こんな女神を想像したのであらうと思はれるが、それとて娘々樣と崇める神の一種とすれば、其の怒りを買はぬ樣に、所謂當らず障らずの態度を以て神を慰める爲めに、之れに祈る風習があるといふ。而して此等の神々は、初めは殊更に小兒を苦しめる意思は無く、只出來心に依つてやるにしても、一度其の味を占めると、更に次ぎの兒に其の魔手を伸ばす虞れがあるといつて怖れ且つ警戒するといふ。

二節　妖魔に對する防禦法